

令和5年度第1回新潟市文化創造推進委員会 会議録

開催日時	令和5年7月7日（金）午前9時半～午前11時半
開催場所	I P Cビジネススクエア （公益財団法人 新潟市産業振興財団 ビジネス支援センター内）
出席者	<p>【委員】（50音順） 伊野義博委員、大澤寅雄委員、多田稔子委員（オンライン）、野内隆裕委員、堀内貞子委員、若林朋子委員 出席 6名 欠席 0名</p> <p>【事務局】 文化スポーツ部次長、文化政策課長補佐ほか3名</p>
傍聴者	0名
報道機関	0社
会議内容	<p>1 開 会</p> <p>（司会）</p> <p>それでは、定刻となりましたので、ただいまより令和5年度第1回新潟市文化創造推進委員会を開催いたします。委員の皆様におかれましては、お忙しい中ご出席いただきまして誠にありがとうございます。私は本日司会を務めさせていただきます、文化政策課の長谷川と申します。どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>本委員会は公開の会議とさせていただいております。会議録作成のため録音録画させていただくことをあらかじめご了承くださいと思います。また、本日はリアルとオンラインのハイブリッドの会議形式となりますので、会場にてご出席いただいております委員の皆様におかれましては、マイクに向かってご発言くださいますようお願い申し上げます。</p> <p>それではまず、本日の会議資料の確認をさせていただきます。事前にお送りしておりますが、会場にご出席の皆様には、改めて机上に配付させていただいております。赤い付箋のついてるものが差し替えとなったものでございます。</p> <p>それでは、まず初めに次第。そして委員名簿。次に資料1次期「新潟市文化創造都市ビジョン」素案について。続きまして、資料2文化創造都市ビジョン素案。続きまして、参考資料1-1次期新潟市文化創造都市ビジョン素案策定過程について。続きまして、参考資料1-2「にいがた」×「文化」座談会。続きまして、参考資料1-3若者ワークショップ。続きまして、参考資料1-4文化に関する市民アンケート調査結果報告書、そして参考資料2推進体制の変更について。この参考資料につきましては、事前にお送りしていた資料に若干の修正がございましたので、資料を差し替えていただきますようお願いいたします。本日お配りした赤付箋貼ってあるものが差し替えとなっております。</p> <p>最後に、参考資料3新潟市文化創造交流都市ビジョン振り返り概要を追加資料として配布しております。また、参考ではございますが、現行ビジョンの冊子および今年度からスタートいたしました、新潟市総合計画2030の一部抜粋を机上に設置しております。</p> <p>会議資料につきましては以上となりますが、不足等ございませんでしょうか。皆</p>

様よろしかったでしょうか。それでは開会にあたりまして、新潟市文化スポーツ部次長の田辺から皆様にご挨拶をさせていただきます。

2 文化スポーツ部次長挨拶

(事務局)

申し訳ありませんが事務方の方から座ってということで、着座にてご無礼いたします。皆様おはようございます。新潟市文化スポーツ部文化政策課長の田辺でございます。本日は令和 5 年度の第 1 回目の新潟市文化創造推進委員会の会合にご参加くださり、ありがとうございます。

多田さんにおかれましてもどうぞよろしくお願いたします。こちらの文化創造推進委員会は昨年度、本来開催すべきところであったんですが、コロナ禍また後ほどまたご説明あろうかと思いますが、新潟市の総合計画との連動ということもありまして、少しお時間の方を頂戴したということで、この点についてこの場を借りてお詫び申し上げます。

さて本日の議題となります新潟市文化創造都市ビジョンについてでございますが、現行のビジョンの方が今年度で終了ということを受けましての素案のご提示ということになります。今年度中の成案を経て向こう 8 年間にわたるビジョンという位置付けでございます。この間、事務方ではかなり議論を続けてまいりまして、どういった角度からビジョンを策定したらいいのかということをも侃々諤々重ねてきたわけなんです。現行のビジョンにつきましては、東京五輪をにらんで、「交流」といった部分に少し重きを置かれたものでありました。ただ今後はポストコロナということもありまして、改めて文化芸術を私達の暮らしの中でどう捉えたらいいのか、少し原点に返った立ち位置の中で、深めていかなければいけないんだろうということで、市民に向けてのメッセージというふうなことも考えて、総合計画を少し深掘りするような形で中身を編成したつもりでおります。本日の意見交換の場におきましては、この点も論点になろうかと思っております。お気づきの点、忌憚のないところをご意見賜ればと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(司会)

ありがとうございました。ここで改めまして、文化創造推進委員会の位置づけについてご説明をさせていただきます。お手元の次第でございます。こちらをご覧ください。中ほどの四角囲いしている部分でございます。本委員会は市政に対する専門的な知識の導入等を目的として開催する懇話会になります。

附属機関に準ずる機関ですが、法律または条例に基づき設置する必要がある附属機関とは異なり、個々の委員から意見を聴取したり、委員同士の意見交換を行った場として開催するものであり、合議体としての審議、答申等を行うものではないでございます。

本日の会議については、次期「新潟市文化創造都市ビジョン」の素案について、皆様よりご意見やご助言等をいただくことを大きな目的としております。

続きまして、今回の会議は本年 7 月 1 日からの新たな体制での初めての会議となりますので、委員の皆様から自己紹介をいただきたいと思っております。

3 委員自己紹介

(司会)

それでは、配付しております委員名簿こちら五十音順としておりますが、この順番でお願いしたいと思います。それでは、まずは伊野委員、お願いいたします。

(伊野委員)

伊野義博と申します。新潟大学教育学部教職大学院の方に勤めていました。教育関係それから文化関係の仕事をしておりました。よろしくお願いたします。

(司会)

ありがとうございました。大澤委員お願いいたします。

(大澤委員)

大澤寅雄といいます。合同会社文化コモンズ研究所という組織を今年から立ち上げましてその代表を、共同代表をしております。文化政策やアートマネジメントの調査研究をしておりまして、現在福岡県に在住しております。どうぞよろしくお願いたします。

(司会)

ありがとうございました。続きまして、多田委員、お願いいたします。

(多田委員)

皆さんおはようございます。和歌山県田辺市からオンラインで参加をさせていただいております。田辺市熊野ツーリズムビューロー代表理事の多田稔子と申します。私は熊野エリアを中心にしながら、田辺市の観光振興にずっと努めてまいりました。最近では、先駆的DMOという、国内で3つぐらい認定されたんですけども、そのうちの1つに認定されまして、ますます観光を手法にした地域作りにいそしんでおります。どうぞよろしくお願いたします。

(司会)

ありがとうございました。続きまして、野内委員、お願いいたします。

(野内委員)

地元の新潟市中央区でまち歩きを中心に案内をしております。2007年に新潟市さんと一緒に地図とか案内板を作ったのがきっかけです。その後、それを活用するグループになればということで、自分で案内したりとか、シティガイドさんのお手伝いをさせていただいたりとかしております。自分の街を楽しんで、その楽しさを発信するというのをモットーに仲間たちと活動しております。よろしくお願いたします。

(司会)

ありがとうございました。続きまして、堀内委員お願いいたします。

(堀内委員)

新潟市芸術文化振興財団のりゅーとぴあ支配人をしております堀内と申します。新潟市の拠点となる施設としての立場からの出席と思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(司会)

ありがとうございました。続きまして、若林委員、お願いいたします。

(若林委員)

若林です。よろしくお願いいたします。私は長らく企業メセナ協議会に勤め、芸術文化を支援する環境づくりに従事していました。

退職後は個人で仕事をしており、夜間は社会人大学院の社会デザインという領域で教員をしております。こんな社会だったらいいなとみんなが思う社会設計を様々な分野から行う研究科で、私は芸術文化分野担当です。

(司会)

委員の皆様、どうもありがとうございました。続きまして、事務局をご紹介します。初めに、文化スポーツ部次長の田辺でございます。続きまして、私、文化政策課課長補佐の長谷川と申します。次に、文化政策課の目黒です。以上、事務局となります。どうぞよろしくお願いいたします。

4 委員長、副委員長選出

(司会)

続きまして、本委員会の委員長および副委員長を選出いたします。新潟市文化創造推進委員会開催要綱第6条第2項に委員長および副委員長は、委員の互選によってこれを定めるとございます。

まずは、委員長を選出したいと思えます。委員の皆様からご意見はございますでしょうか。

無いようでしたら、事務局の案といたしましては、前回も本委員会の委員長をお引き受けいただいた若林委員にお願いしたいと思えますが、委員の皆様、いかがでしょうか。

(異議なしの声)

ありがとうございます。それでは、委員長を若林委員にお願いいたします。続いて、副委員長の選出です。委員の皆様からご意見はございますでしょうか。それでは無いようですので、事務局の案といたしましては、前回も本委員会の副委員長をお引き受けいただいた大澤委員にお願いしたいと思えますが、委員の皆様、いかがでしょうか。

(異議なしの声)

それでは、副委員長を大澤委員にお願いいたします。次に、次第の5に入ります。それでは、ここからの進行は若林委員長にお願いいたします。

5 意見交換 次期「新潟市文化創造都市ビジョン」素案について

(若林委員長)

長谷川さんありがとうございました。うまい進行ができるかわかりませんが、頑張りますのでよろしく願いいたします。お手元の資料について事務局から説明をいただく際に、これから意見交換する内容を頭に入れておいていただくとよいかと思いますので、今日の意見交換のポイントを3つ先に申し上げます。

1点目、現行ビジョンの振り返り、2点目、次期ビジョンの素案に対する感想やご意見、3点目、次期ビジョンの推進体制と評価についてです。この3点を本日はディスカッションします。それでは、事務局の方から次第5の意見交換、次期「新潟市文化創造都市ビジョン」素案について説明をお願いいたします。

(事務局)

会議資料につきましては既にご一読いただいているかと思っておりますので、私からはまず次期「新潟市文化創造都市ビジョン」の素案の概要についてご説明いたします。A3の資料1をご覧ください。

左上1策定趣旨、位置づけをご覧ください。次期ビジョンは、今年度末までを計画期間とする現行の新潟市文化創造交流都市ビジョンの終了を受け、総合計画を補完する文化芸術の振興に関する分野別計画となります。計画期間は令和6年から13年度の8年間、令和9年度には中間見直しを予定しています。

現行計画であります文化創造交流都市ビジョンについては、中段の表中にお示した通り、平成29年度から開始いたしました。大きくは令和2年の新型コロナウイルス感染症の発生、拡大前後で様相を異にしております。

前半では、東京2020大会を契機とするシティプロモーションや誘客を念頭に、各種文化催事や市民活動の発信など幅広く行いました。

平成31年度から令和3年度までの3年間では、市全体の財政基盤強化に向けた集中改革の取り組みにより、文化芸術関係事業の大幅な統廃合を行いました。

後半期は、コロナ禍によって各種シティプロモーションや誘客政策は実施が困難となる中で、市民による文化芸術活動そのものが消失してしまわないように、その下支えに力点を置いた政策を展開いたしました。

少し具体的にご紹介いたしますと、感染対策を取りながら文化芸術活動を実施するためのガイドラインの策定に加えまして、相談窓口の設置、感染対策のモデルとなるものを文化芸術団体や施設管理者などに紹介するモデル公演、あと活動の場や発表の場が少なくなってしまった団体からご出演いただく公演事業になります。市民の文化芸術活動そのものの種火を消さないことを念頭に、各種支援政策を展開していく中で、コロナがなくとも潜在していた課題かと思っておりますが、地域の繋がりの希薄化や文化芸術の担い手不足、団体の活動基盤の脆弱さといった根本的な課題が顕著にあらわれたかと認識しています。

また、社会的背景といたしましては、人口減少や少子高齢化といった人口構造の変化ですとか、ICTの進化、SDGsの推進といったこともありますし、また現行ビジョン策定作業時には制定されていなかった文化芸術基本法の制定もありました。

現行のビジョンの計画期間中、平成29年度、平成30年度の2年間を除くと、残り5年間は財政的な、そして感染症の影響を強く受けているということで、現行

ビジョンの成果、課題を受けた次期ビジョンの策定という策定プロセスに難しさがあると認識しています。

しかしながら、資料右側に記載のあるように、文化芸術活動を行う「個」の気づきというものを起点に、人と人とがつながることで、地域といったまとまりとなり、それがまち全体の活性化につながっていく。そういう流れを描くことで、先ほど申し上げました潜在的な課題の解決に向けた第一歩とできるのではないかと考えております。

記載のとおり、基本理念「文化芸術によって育まれた市民一人ひとりの心の豊かさやいきいきとした暮らしが、将来にわたってまち全体を活性化している」に3つの柱をぶら下げております。こちらの基本理念につきましては、前ビジョン、現行ビジョンの内容と基本的には同様の内容になります。

次期ビジョンにおいては、総合計画でも書かれている心の豊かさを加えています。基本理念にあります3つの要素を分解したものが、各柱、政策の方向性になります。これは個としての市民一人ひとりの感動や発見が、人と人とをつなぎ、まち全体を活性化するという、人・地域・まちそれぞれが循環し、相互に関係し合いながら発展するイメージを具象化したものです。

各柱については、青字の施策の方向性と、それを通じた到達する市民の姿をセットにすることで、ビジョンが実現したい状況を明確にしております。また、これらを実現するための方策については、後ほどご説明させていただきますが、素案の11ページから13ページの方に記載しております。

次期ビジョンは「本市の文化政策における基本理念と施策の方向性を明らかにし、文化芸術関連施策を効果的、効率的に推進するための指針」でありますので個別具体の施設についてや事業については特別触れておりません。

市民一人ひとりへのメッセージという位置づけで、このビジョンの計画期間である8年後には、文化芸術によって市民にどのような変容が起きているのかという視点で書いたビジョンになります。このビジョンが描く市民の姿を念頭にいただきながら、文化セクション、各文化施設といった各主体が今後、事業を企画立案等していくこととなります。

資料右下の評価手法についてです。配布資料にあります[参考資料 2](#)もあわせてご覧ください。[参考資料 2](#)に記載の通り、現行ビジョンの推進体制については、文化創造推進委員会、文化創造推進本部、アーツカウンシル新潟の三つの組織がそれぞれの役割を果たしながら、一体となって取り組むとしておりましたが、現行ビジョンでは扱うテーマが多岐にわたることから、どうしても全庁的な資料の取りまとめに時間がかかりますし、推進委員会も、例年、年度末に1回開催してきていたということで開催頻度にも課題があったという次第でございます。

次期ビジョンにつきましては、イメージするところ、より柔軟により機動的にするために、常設の推進委員会という形は解消し、行政において個別具体的な相談がある際に、その都度、アドバイザーに助言をいただくことで機動力を高めることができると考えています。

評価という点に関しては、本市の最上位計画の総合計画2030の方で政策指標や取組指標というものを設けているため、数値的などころでは一定の評価がなされるものです。また、中間見直しのタイミングで市民アンケートを別途取ることも予定

しています。

それによって、数値では現れない市民の所感や意見というものをすくい上げることができると考えています。第三者的な視点という意味合いでは、先ほど申し上げましたアドバイザー制度の構築により、必要に応じて個別具体的に意見をいただく予定ですし、中間見直しの際などには複数人に集まっていただいて総合的にご意見をいただくといった有識者会議も念頭に置いているところです。

現行ビジョンの推進体制の横並びの図では、アーツカウンシル新潟の部分には文化活動支援（現場）と記載してあります。次期ビジョンにおいても引き続き、市民と行政との間の中間組織として、市民の文化芸術活動の支援にその専門性を発揮していただくこととしています。

現行ビジョンの推進体制の課題の説明の中で、扱うテーマが多岐にわたるとお伝えいたしましたが、次期ビジョンで伝えている「個」に対する活動支援、人のつながり、まちの活性化ということは、要素として含まれているところではありますが、その幅広さであったり、横並びの推進体制の記載などによって分かりにくい部分があったかと思います。次期ビジョンでは、市民の活動支援、環境整備を意識しており、推進体制についても、それぞれの関係性を明確にしています。なお、現行の推進委員会の役割といたしまして、アーツカウンシルの検討、評価と記載がありますが、その設立から令和2年度までは、アーツカウンシル新潟運營業務という市の事業を財団が受託しているという業務委託の関係であり、市の事業に対する評価という位置づけで、推進委員会より評価や意見等をいただいております。

令和3年度からは市の事業ではなくなり、財団事業に対して市が補助するという形に変わったことから、令和3年度からはアーツカウンシルの評価が推進委員会としては不要となりました。本来であれば切り替わったタイミングで本委員会の所管事務などについて整理をかけるべきでしたが、本日のご説明とさせていただきます。

続きまして、素案についてご説明させていただきます。現在配布しております素案は、委員会開催にあたって庁内や所管施設などからの意見等を可能な限り反映しているバージョンになりますが、一部調整が済んでいない部分もあります。現時点での最新版というような受け止めをお願いできましたら幸いです。

それでは資料2をご覧ください。既に資料1でご説明済みのところもありますので、抜粋してご説明いたします。素案6ページ、文化芸術の範囲についてです。市民1人1人へのメッセージということを意識し、文化芸術というものを市民の方々がよりイメージしやすいように具体例を記載しております。

9ページからが具体的な基本理念、施策の方向性、取組方針についてになります。11ページをご覧ください。1つ目の柱、心の豊かさについては、「個」に焦点を置いている部分になります。リード文に記載の通り、文化芸術における作品などを鑑賞者と演者の共同作品という捉え方をしています。そういった関係性に一人ひとりが気づきを得ることで、文化芸術活動だとは認識していなかった個々の活動を文化芸術活動だと認識するようになり、主体的・能動的な関わりに繋がるという考えです。そういった気づきを得るために、各主体が鑑賞機会の提供や体験・創作・発表の機会の提供を行います。機会を提供するという視点だけではなく、その事業等を通じて市民がどのように変わるのかということイメージしていただきながら、

気づきを得るための仕組み作り、市民の姿を念頭に置いてもらう必要があります。

2つ目のダイヤの部分ですが、個々の文化芸術活動への支援、環境整備を意図しています。個々の活動や発表の場として文化施設などがありますが、最寄りの相談窓口としても機能することを念頭に、施設管理者など同士が顔の見える関係を築くことをイメージしています。

12 ページをご覧ください。二つ目の柱、いきいきとした暮らしは、文化芸術を介した人と人とのつながりや、そのまとまりを意識しています。地域コミュニティとネットワークという言葉が出てきますが、地域コミュニティはいわゆる場所に紐づくつながり、ネットワークは場所ではなく、例えばジャズといった愛好するものでのつながりというものを意識しています。

13 ページをご覧ください。最後の柱、まち全体の活性化の部分は、心の豊かさ、いきいきとした暮らしにおいて触れてきた個々の気づきを起点として、人と人とのつながり、多様性の受容、社会参画といった地域の豊かさの高まりを経て、一人ひとりが体現するまちの魅力というものが、市のイメージとして内外に発信されていくということをイメージしています。

新潟の特色ある文化としてみなとまち文化や踊り文化などを挙げておりますが、そういった既に確立している文化だけでなく、個々の文化芸術活動をも誇りに思い、大切にしている。また、他分野との連携ということで、これまで関わることの少なかった分野の方々との交流などにより、新たな価値が生み出されている。そういった市民一人ひとりの姿というものをまちの魅力として捉えています。

1つ目 2つ目 3つ目と柱を順に説明してきましたが、順番にステップアップしなければならないというのではなく、どれか1つだけでも問題ないかと考えてますし、また順番もバラバラでも問題ないかと考えています。それぞれの柱というものが独立して存在していますが、孤立しているのではなく、相互に関係するという全体のイメージになります。

駆け足になりましたが、次期ビジョンの素案について事務局からの説明は以上になります。

(若林委員長)

ご説明ありがとうございました。ではここから1時間ほど、11時20分ぐらいまで皆さんと意見交換をしたいと思います。ご発言の際、資料のページも言っていただくといいかなと思います。

多田さん、聞こえておりますでしょうか。何か聞こえないこと、こちら側の議論に参加しにくい状況がある場合は遠慮なくお声掛けください。

(多田委員)

ありがとうございます。

(若林委員長)

ではまずは、「現行ビジョンの振り返り」についてご意見を伺います。文化芸術ビジョンや基本計画などを話し合う際は、現行のビジョンの推進状況や課題、思わぬ成果を確認して次に繋がりますね。現行のビジョンについての追加資料は参考資料

3の振り返り概要というところ。それと参考資料2の「推進体制の変更」の部分が現行の推進体制です。その2つについてご意見を伺いたいのですが、大澤さんに口火を切っていただきましょうか。

(大澤副委員長)

副委員長という立ち位置なんですけどいつも大体、私、口火を切らせてもらうのが得意なので、こういう時に皆さんが考えていらっしゃる間に切らせていただきます。最初に田辺部次長からもご発言があったように、東京オリンピック2020、それからコロナ禍がありました。その前に、新潟だけではなくて、日本全体がオリンピックに向けて文化芸術振興のあり方がすごくシフトチェンジしたんですね。そこに向かって走っていたけれどもコロナがあったことで、文化芸術振興が計画したようにはできなかった。日本全体がそうだったと思いますし、そこで、改めて文化芸術振興って何のためにやるのかを考え直す機会だったと思うんです。

そういう意味では現行のビジョンがコロナ前、オリンピック前に描かれていたものであったことは、そこからの継続性も大事なんだけれども、改めて考え直すべきことってのはたくさんあると思って、そういう意味では、もう1回、市民一人ひとりっていうことが主語になっているビジョンっていうのが大事だなと私も思ってこれを見ていました。

あと推進体制がどう変わるかはこの後に議論があつていいと思うんですけど、現行のビジョンに関して僕自身も反省なんですけれども、自分が2年前、この会議がどういう立ち位置だったのかが、あまり自覚がなかったといいますか。その中でお手伝いできることが少なかったなという自分の反省でもあるし、少し何かお手伝いできる機会がもうちょっといただけるとよかったかなというのも率直に思うところではあります。なのでこの後、どういう推進体制にしていくのかっていうところで、自分自身がどういう役割を果たしたいのか、いや自分じゃなくても、必要となる役割を、皆さんの意見を聞いてみたいなと思うところです。ひとまず以上です。

(若林委員長)

いかがでしょうか。どなたからでも。

(伊野委員)

アーツカウンシルが出来たときに様々な文化活動を積極的に、様々な団体とつなげて市の活性化に貢献されたと思うのですが、その後の経過と次期ビジョンの中での位置付けですよね、どういうふうに次期ビジョンの中に入り込んでいるのか。ここら辺がどう発展的に位置付けられていくのか、どんな役割を、今度は出されていくのか、このあたりがちょっとまだ飲み込めていないので、教えてください。

(若林委員長)

ありがとうございます。事務局からいかがでしょうか。

(事務局)

事務局から説明させていただきます。わかりにくい部分とも確かに思うのですが、当初の現行ビジョンの体制の中においても、あくまでアーツカウンシル新潟というのは芸術文化振興財団内にあった組織になります。ただ、そのアーツカウンシル新潟が担う業務というものが、令和2年度までは市の業務であったという考え方になります。それが設立から一定の期間を経まして、しっかりとその財団の中の組織として位置づけられていく中で、市の事業というものではなく、芸文財団の事業というような形にシフトしたという形になります。

(伊野委員)

やることは、基本的には一緒ということ。

(事務局)

現行ビジョンの上の図にもありますとおり、アーツカウンシル新潟というのはこの四つの機能がございましたが、市民などの文化活動の多様な主体との間での支援相談や、それに必要な調査などを行っていただいていた形が、次期ビジョンの中でも、今度は財団の中に入っていますが、引き続き、行われるという形です。

(伊野委員)

登場したときには、非常に強く市民とつながって、つなげて様々な企画をされていたという印象があるんですが。そのパワーが弱体化するのはとても寂しいなっていうか、むしろ財団の中でもっとさらに発展的な形になっていくような仕組みになっていくといいと思います。

(若林委員長)

ありがとうございます。極めて重要なご指摘だと思います。カウンシルの皆さんは、今日はお越しではないんですね。前回とそこも違うのかなと思うのですが。このビジョンを推進していくときに、財団ではどこが窓口になるんですかね。推進の経過を含めて財団にオブザーブしていただく必要があると思うのですが、その窓口は引き続きアーツカウンシルでよろしいのでしょうか。

(事務局)

アーツカウンシル新潟も含む財団という形で、そういった市民の活動を全体として支援していただくという形になるかと思います。アーツカウンシルだけがオブザーブしていくというよりはあくまで財団として関与していただくというような形になるかと思います。

(若林委員長)

このビジョンの推進においては、確かに財団全体が支援することになりますが、ビジョン策定過程での財団としての意見の取りまとめなどは、今後は同財団のどこが窓口になるんですかね。特にまだ決めてない感じでしょうか。

(事務局)

具体的にそこまでの話し合いはしておりませんが、財団の事務局とアーツカウンシルが一緒になってやっていくイメージなのかなと想定していました。

(若林委員長)

アーツカウンシルは、財団の一機能ではあるんですが、設置の背景からすると、ゆくゆくは政策提言的な機能も持つ、市の文化政策のブレインになっていくような期待を込めて作られたものと理解しています。こうしたビジョンの策定にも積極的に参加していただくと、伊野さんが指摘された「外から見たときに縮小と見えてしまう」ことにならないのではと思いますが。アーツカウンシルについてご意見ある方いらっしゃいますか。せっかくなので、大澤さん。

(大澤副委員長)

重ねて意見を言わせていただくと、総合計画を僕配られたもの以外にも、ネットで見せていただいた時に、新潟市全体の総合計画で文化芸術と紐づく施策がこんなにあるのかと思ってびっくりしたんです。それぐらい文化という領域の政策としての優先順位、文化芸術振興そのものが優先順位高くなっただけではないのかもしれないんですけど、文化と紐づく政策メニューが増えたのは、アーツカウンシルがあったからだなと思いました。

きっとアーツカウンシルがそういう役割を果たしたからこそ、様々な施策と繋いでくれたんじゃないかと。おそらくなんですけど、財団というのは今までは施設の管理運営を主体とする業務だったとしたら、それではできなかったことができるようになったということは、現行のビジョンでの成果だと思うんです。この成果を引き継ぐとしたら、やっぱりアーツカウンシル新潟の機能は決して弱体化させてはいけないんじゃないかと思っています。

(若林委員長)

ありがとうございます。堀内さん何かご意見ありますか。

(堀内委員)

私は芸術文化振興財団の一施設であるりゅーとびあなのですけど、ちょっと表現がですね、上の表ではやはり皆さんおっしゃるようにアーツカウンシルがかなり重要視されて登場してるわけですね。私もその頃1年だけちょっと事務局におりましたので、大事なのだろうというふうな形で見ておりましたけれども、下の表のほうになりますと、財団（アーツカウンシルを含む）となっておりますので、財団というのは、アーツカウンシルもありますけれども、私達のようなりゅーとびあ、歴史博物館ですとか、小澤家だとかいろいろななんていうんでしょう、目的を持った施設が複数あります。そこを一緒に財団でというふうに言われるとちょっとどうなのかなと。やはり推進体制の中で一番大事な任務を負ってくるのは例えば支援相談というふうな意味合いで持ってくるのはやはりアーツカウンシルの役割なのかなと。今までのご意見でもございましたように、アーツカウンシルは財団の中にはありますけれども、やはり文化を推進していく立場では、市と両輪となって進め

ていくような、そのような形が見えてこない、いくら立派な計画を作っても推進体制というのは非常に重要なところなので、そこを大事にしていかななくてはいけないのかなと思っております。

(若林委員長)

ありがとうございます。野内さん、今のアーツカウンシル、あるいは推進体制でご意見ありますか。

(野内委員)

アーツカウンシルの方に声かけていただいて、こちらの会に来たわけなんですけど、いらっしやらないので特に意見はないです。

現行ビジョン次期ビジョンへ意見ですが、新潟市さんとはまちあるきの地図や案内板の製作、ガイド養成等、担当部署の垣根を越えてお手伝いさせていただきましたが、これからも部署を越えてそれらを、活用していただければと思っています。

路地連新潟というグループは、自分のまちを楽しみ、その楽しさを伝えるスタンスで活動しておりますが、主に3つの目線で楽しんでおります。

1つ目は、プラタモリ等でもやっている地形目線で新潟の町を楽しむ事です。日本最大級の新潟砂丘に着目していた訳ですが、みなとぴあの常設展示ではその事が大きく紹介されていますし、テレビ放送をきっかけに、新潟市各区のガイドさん達が地形目線で案内するようになってきました。

2つ目は、北前船の寄港地としての「湊」みなとまち文化です。2007年から新潟市さんと一緒にガイド養成講座のお手伝いをさせていただきましたが、それらの効果がここに現れていると思っていますし、2008年に、まちづくり推進課さんと作った「新潟の町・小路めぐり」地図は、現在も総合学習で活用されて続けています。また2009年にみなとまちのシンボル「日和山」を整備していただいた事など、ハードとソフトの整備とそれを活用する市民のアクションに繋がっていると思いますので、これからも市民と共に歩いていっていただけたら、ありがたいなと思います。

3つ目は、開港地新潟の「港」みなとまち文化です。開港地としての新潟を、イザベラ・バードというイギリスの旅行家が訪れてレポートした **UNBEATEN TRACKS IN JAPAN** (日本奥地紀行) を読んでみると、非常に面白いのです。なので有志で「新潟イザベラ・バード研究会」を結成し、イザベラ・バードの目線で発信しよう動き始めています。現在、中央区のまちあるきイベント「えんでこ」でも新潟シティガイドさんによる、イザベラ・バードのコースが誕生しております。

地形目線のまちあるき、北前船のみなとまち文化、イザベラ・バードを活用した開港地としての魅力発信等、これからも市民と共に歩いていって欲しいと思っています。

もう少し、力を入れて欲しいと思う部分は、新潟市が日本遺産「北前船の寄港地船主集落」に認定されているのですが、その活用をもう少し頑張ってもらいたいと思っています。

(若林委員長)

野内さん、ありがとうございます。現行のビジョンで実にいろいろな展開があったのですね。体制についても大事なことを言っていただきました。つまり、課の垣根を越えて施策を進めてほしい、一緒に歩いて行ってほしいということ。となると現行ビジョンと次期ビジョンの推進体制の違いの図で、次期ビジョンは新潟市芸術文化振興財団という大きな枠になっていますが、課の垣根や施設の枠を越えているところ組んでいるところという、やはりアーツカウンシルなのかなという気もします。いろいろな課や団体、市民から支援や相談を受けて日ごろから繋がっているアーツカウンシルを中心に、このビジョンを推進していくという体制をもう一度検討していただくといいのかなと、皆さんのお話から思いました。

多田さん、体制の件でコメントがあればお伺いできますか。

(多田委員)

ありがとうございます。アーツカウンシル新潟の位置づけがどう変わるかによって、いろんな施策が変化していくのかなという印象です。文化とか芸術とかいう言葉は本当に多層で、どの層の文化や芸術を言うのか、というのが深い疑問としてあります。観光もそうなんですけれども、ただ誘客という表層の部分からどんどん掘り下げていくと、地域の文化や芸術そして教育、地形みたいなどころまで行きます。この文化芸術も同じだと思います。文化芸術のどの層を掘り下げて、話題、課題にしていくのかということ少し自分の頭の中でも整理しつつ、この議論に参加しなきゃと思う中で、やはりこのアーツカウンシル新潟の位置づけを、全体の政策の中でどんな役割、どんな位置づけにするかっていうのが最も大きいところかなと感じています。このアーツカウンシル新潟のことを考えるときに、私ども田辺市熊野ツーリズムビューローという一般社団も、同じような課題だなと皆さんの議論を聞いていて思いました。非常に観光振興に大きな役割を果たしているし、地域や観光客や、そして行政との繋ぎをしている中間支援組織だと自負はしていますが、最後に問題となるのは、この組織を維持していくための人材と財源なんですね。これをどう確保し続けていくかというのが今の日本のDMO全体の大きな課題でもあるんですけれども、そこに行き着くわけですね。このアーツカウンシル新潟という組織も多分そういうことが深い問題として横たわっているような気がします。私達は、市民の側から申し出て立ち上げた組織なんですけれども、財源の構成を言いますと市からの委託費関連が1割ぐらいしかないんですね。で、あとの9割ぐらいを自主事業で着地型の旅行事業なんですけれども、一般企業と同じように売り上げを立てて稼いでいます。

ところがこのコロナでインバウンド需要がほとんど止まって、売り上げが9割減り、存続の危機に陥りました。本当に組織の維持が大問題で、金融機関からの借入れでしのいだんですけれども、今回のこのアーツカウンシル新潟の位置づけを考えると、我々と一緒だなという感想を持って聞いておりました。上手く伝えきれませんが、中間支援組織の役割と位置づけについて考えるときの課題提供として発言させていただきました。

(若林委員長)

ありがとうございました。「文化芸術は非常に多層的で、これをどう位置付けていくかによってビジョンの中身が変わってくる」というお話は本当に大事ですね。

現行ビジョンの振り返りの中身についてはいかがですか。振り返りの資料^{参考資料3}に現行ビジョンのもとで達成できたことが書かれています。それから、市事務局は、現行ビジョンが総花的であると課題認識していると、素案に書かれています。現行のビジョンはお手元の冊子のようにボリュームがありますが、次期ビジョンは、ここまで多岐に網羅するのではなく絞る予定だと伺っています。

現行ビジョンの振り返りについては、皆さんから、推進体制がやはり大事だというご意見をいただきました。

(伊野委員)

現行ビジョンの推進にあたって、先ほど野内さんからも関係するお話がありましたけれども、市民および様々な団体が文化活動を盛んにやってらっしゃるわけですよ。そこと行政とか財団とかがどう繋がるのかが大きな核になってくると思うんですが、現行ビジョンの反省点としてはそこが機能したのか、それともどういう課題があって、今の理念に繋がってきたのか、このあたりをお聞きしたい。

(事務局)

今のご質問は、現行ビジョンにおいて、その多様な主体との関わりがどうだったのかということでしょうか。

(伊野委員)

そうですね。

(事務局)

先ほど伊野委員もおっしゃったように、アーツカウンシル新潟が様々なもの間に立って繋げるという役目をしていたというようなお話があったかと思います。大澤委員もおっしゃっていましたが、現行ビジョンにおいてそういった活躍をしていただいたということは確かなのかなというふうに認識しております。次期ビジョンにおいても、そういった専門性のある方々から中間支援組織として活躍いただきたいというのは、引き続きというような形で認識しておりますが、現行ビジョンにおいて具体的にどう人と人とのつながりを構築できたかという具体例については、手持ち資料がなく今ご説明できません。申し訳ありません。

(伊野委員)

新しい方のビジョンの中に「ネットワーク」がキーワードとしてあるんですけど、それが非常に重要だと思って質問させていただきました。

(若林委員長)

ありがとうございます。今の伊野さんのお話も含めて、次期ビジョンの推進体制のイメージ図は、もう少し詳細に書いてもいいかもしれないですね。大澤さんのご指摘のように、総合計画の方で、実際に文化政策とは標榜してなくてもいろいろな課で文化的な取り組みがあり、おそらく垣根を越えていくのではないかと。となると、この「行政」という枠の中に様々な課を記載するといいいのではないのでしょうか。「市民」というこの丸は、市民一人ひとりもそうですが、まち歩き団体など、様々な市民団体もあるわけです。現状はそこが見えてこないような気がします。市民一人ひとりと、まちづくり団体や芸術文化団体などの市民団体が一体となって推進していくことが図に表れているといいいのでは。そうすると、新潟市芸術文化振興財団も、財団の中の様々な部門を書き、ビジョンの推進や相談対応は、アーツカウンシルが中心になっていくことを明示する。ビジョンを受け取る市民としては、どこに相談したらいいかもわかるのではと思いました。

司会の私が皆さんの意見の後にいろいろと言うのは良くないですが、次回までに少し検討いただけたらと思います。堀内さん、現行のビジョンでやってこられて、思うところは何かありますか。

(堀内委員)

今お話とちょっと関わりがあるのかなと思っているんですけど、やっぱりその推進体制とかネットワークとか、そういうふうなものが大事と、財団は財団であるわけなんですけども、新潟市域が広いので、各区には、例えばいろいろなホールとか文化施設とかたくさんあるんですね。やっぱりあの合併してからは合併建設で建てたりとか、そういうものもありますね。なのでりゅーとぴあは拠点とは言われておりますけど、りゅーとぴあだけの力では何ともできない部分もごございます。例えば、この前も **Noism** を北区でやってくんないかとかね、そういうふうな細かい市民の声とかいろいろなものもごございます。私達もずっとそういう地域の文化会館と連携できればいいなというのは、気持ちとしてあったわけなんですけれども、そこがなかなかうまくいかないっていうのは考えてみますと、地域にあるそういう各区にある施設というのは、指定管理者っていうのがまた違ったり、あるいは直営でやっていたり、各区役所が直営でやっていたりとかその形態がバラバラなんです。そういうバラバラな形態をうちの財団だけの力でやっていくっていうのが、連携を取っていくっていうのがなかなか大変なことなんだなというふうな、気持ちがありますね。ですので、例えばこの取り組み方針の心の豊かさのところの下にあたるのかなと思って見ていましたけれども、各関係団体施設が定期的に情報共有や意見交換を行うことで、市民の主体的な文化芸術活動に資する支援の充実を図りますって書いてあるんですけど、これは主語が何もないわけなんですけれども。これを財団だけにしていうのはなかなか大変だなと思いながら読んでいて、やはり広がりを持たせるには、財団と市とそれぞれの役割分担を持ちながらやっていくと将来的にはそれが根付いてくれば、財団がそこを担うとかいろいろなやり方があるんでしょうけども。最初の一步というのはやはりその計画を描いた市が入り込んでいかなければいけない、あるいはアーツカウンシルかもしれない、そういう部分が大きいのではないのかなと思って現在のこの出来たものを読んでおりました。

(若林委員長)

ありがとうございます。各区、地域の文化会館も図に推進体制のところに入れて、役割分担も含めて次期のビジョンの素案を考えていきましょう。次期ビジョンの評価についてディスカッションできたらと思います。大澤さん口火を切る役割をまたお願いいたします。

(大澤副委員長)

さっき言ったように総合計画が上位にあって、このビジョンがあるわけなんですけど、その総合計画を見たときに、わりと書かれてあることが、施策レベルのことが書いてあるわけですね。通常、ビジョンがあって施策、事業っていうふうな順序があるんですけども、総合計画の中にもう既に施策があってそこから今ビジョンを作ろうとしていることが、こういう順序でどう議論すればいいんだろうなというのが最初に思ったところなんです。ただこういうふうにも考えるなどと思ったのは、提示されている総合計画が、新潟市全体としての総合計画で、例えば伝わるかどうか分からないですけども、地図が提示されていると。地図の中には文化スポーツっていう分野が、部門があって、その文化芸術の振興というのがあるわけですけども、それは上から見た地図なんですけど、今回私達が議論しようとするのはその上から見ている平面の地図を1回断面で見て、その文化芸術の地面の下の方、根の張り方といいますかね、どうやって根を張っていかうか、どうやって幹や枝を伸ばそうかっていうところに視点を置くと、平面というよりは断面で見たときにどんなイメージを私達はどんなふうにも育てていけばいいのか、議論した方がいいんじゃないか。だから、ビジョンがあって、施策があって事業があってっていうことをどんどん具体化させていく話と少し違うかなと思ったんです。上から見ている絵の断面を具体化、言葉にしていくというか、そんなイメージだなと思ったんです。

ちょっと今のは抽象的な話なんですけども、施策の方向性3本の柱っていうのはさっきの説明の中でも、心の豊かさっていう個人、それからいきいきとした暮らしっていうのが人と人とのつながり、そしてまち全体の活性化というまちっていうふうな説明を聞いて、なるほど、そういう広がりなんだなと。それも断面をイメージしながら僕は聞いていたんです。そうやって一人ひとりが文化を根づかして、芽を出して、それが地下でも地上でもつながって、森になっていくんだなというイメージを一生懸命していたんです。

この11ページ12ページ13ページあたりが、ビジョンの中で一番な中身的になるわけですけど、そこが最終的に対応する総合計画っていうところの枠があるわけですね。これも先に書かれていることだから、これを変えるわけにはもういかないっていうのも実はあるんだなと思って見ていたんですけど、この対応する総合計画がよく見ると重複する項目が3本の柱をまたぐわけですね。例えば、当然なんですけど政策2「文化」で施策1「文化芸術の活性化」が、心の豊かさにも出てくるし、いきいきとした暮らしにも出てくるし、まち全体の活性化にも出てくる。これが多田さんが先ほど言われた文化芸術の多層性っていうのは、もうまさにこういうことだとは思っています。ただこの重複をそのままにしておくと、つまり、やることがこの3つの方針それぞれの方向性でそれぞれ考えなきゃいけないとなると、方向性で迷ってしまい、どちらを向いてやるのかよくわからないっていうことがもう起き得

ると。やる内容によってはそうやって必ずしも一方向だけじゃない取り組みというのもあると思うんですけど、僕の意見としてはちょっと重複が多いなっていうのがちょっと気になったところなんです。もう少し重複を減らすとしたら、この3つの方針そのものは僕はそんなに違和感はないんですけども。心の豊かさっていうところに、もっとその文化そのものに対しての取り組み、文化芸術そのものの振興ということを原点に戻るといっていいかと、取り組みがあった方がいいんじゃないか。そういう意味で、文化財の保護とか保存がいきいきとした暮らしに今位置付けられているんですけども、むしろ心の豊かさの方に文化財の保護、保存・継承があってもいいんじゃないか、私だったらそう考えるなと思ったんですね。いきいきとした暮らしっていうところの対応する総合計画が、市民活躍の枠が非常に多いことに気がついたんですけども、これもすごくよくわかる。例えばその障がいのある方の社会参加、差別の解消とか人権とか、共生っていうところは今、非常に文化が期待されている領域なので、ここのところは非常に大事にしていきたいなと思うんです。で、まち全体の活性化のところをみると、ここにも市民活躍が出てくるわけですね。いやこれは、いきいきとした暮らしの方に位置づけといた方がやるべき方向性がすっきりするんじゃないかと思いました。まち全体の活性化は、いろんな政策メニューがそれこそ農林水産とか産業交流とかにも入ってくるわけです。これも期待されている役割なんですけれども、僕はこういうその文化芸術を「活用する」という言い方がいいかどうか分からないんですけども、社会に対してどのような可能性を広げていくかっていうチャレンジの部分だと思うんですね。そういう切り口のまち全体の活性化に位置付ける総合計画のメニューっていうのは、他にもあっていいんじゃないかとも思いました。私からそんなところですよ。

(若林委員長)

大澤さんのお話の背景には、この「新潟市総合計画 2030」があるんですね。これを見ていただくと、確かに文化スポーツ分野の政策あるいは施策が既に定められているんですね。私達が作っていくビジョンで、これとは異なる政策・施策を作るわけにはいかないというか、基本同じ方向でいくことにはなる。この総合計画と結びつけて、どのようにビジョンを作っていくかということなんですよ。

ちなみにビジョンの枠組みですが、前は「基本方針」を3つ、今回は「取組方針」を3つと「施策の方向性」が示されているということですね。少し言葉が変わっています。確かに、素案のスライド11、12、13の「対応する総合計画」を見ると、文化スポーツだけではなく、市民活躍とか農林水産、産業交流にも結びつくように示してくださっています。やはり、文化は多層的であり、幅広い。冒頭で多田さんが示してくださったようなお話とも本当に繋がってくると思います。

大澤さんから「上からの俯瞰図ではなく、もう少し断面で見よう」との提案がありました。これは、鳥の目ではなく、虫の目になろうということだと思うのですが、虫の目で見て現状の取組でこの視点が少し足りないんじゃないかとか、ここはいいねというところがあったら、ご意見いただけたらと思います。

先ほどの堀内さんからの「主語がない」とのご指摘は大事ですよ。誰がやるのかにも関わるので、主語にも注目して見ていただくといいと思います。先ほどと順番変えて多田さんいかがでしょう。

(多田委員)

油断していました。虫の目になる前にちょっと鳥の目の話をしたいんですけども、新潟市の計画の中でいかに文化政策を大事にしているのかということが非常に表れていると思うんですね。そんなに大して他の町のことは知らないんですけども、これほど文化を軸にしながら施策を組んでいるっていうのは、珍しいというか、特徴的じゃないかとそんなふうに思いながら見させていただきました。そんな中でですね、この「新潟市文化創造都市ビジョン」っていうのは、文化スポーツの分野別、分野の個別計画、分野別計画として位置づけているということになっていますが、その関係性が私あんまりよく分からないんですね。分野別計画、その辺もう少し詳しく教えていただけたらなと思います。

(若林委員長)

鳥の目、ありがとうございます。事務局から、位置づけ、ビジョンの関係性について説明を加えていただけますか。

(事務局)

素案の3ページにありますとおり、市としての一番上にある計画が新潟市総合計画2030です。総合計画においていくつか分野が分かれている中で、文化スポーツというところがあり、その文化の部分の個別計画という形になります。文化という分野に関して抽出した計画と言いますか、俯瞰ではなく視点を変えて層で見るというような考え方になるのかと思います。

(若林委員長)

ありがとうございます。法律と基本計画の関係性と似ていますね。例えば、国の文化芸術基本法はかなり大きいので、仏に魂を入れるべく、基本計画＝アクションプランを個別計画として立てます。新潟市総合計画も同じ位置づけで、大きな枠組みとして2030があって、個別具体分野のアクションプランに当たるものを立てていくのがこの創造都市ビジョンだと思うんです。ただ、少し整理しないといけないのが、今回アクションプランまで立てるのかどうか、私も分からないところなんです。 「ビジョン」なので個別計画の方向性を定めるだけでいいのか、それとも具体的な事業、アクションを定めていくのか。そのあたりはいかがでしょうか。

(事務局)

基本的にはそういったアクションの部分については、このビジョンの中で触れる予定はありません。ただこのビジョンというものを作ったときに、心の豊かさ、いきいきとした暮らし、まちの活性化というのがそれぞれあるわけですが、そこにどういった事業が紐づくのかという何かしらリスト化したものは、別途作る予定です。一方、総合計画において、先ほどからお話があったように具体の政策のところまで書いているというところがございますので、行政が具体的に何をやるのかというビジョンというよりは、視点をまさに変えまして、行政がすることによって市民がどう変わるのかというような目線のビジョンという形になります。

(若林委員長)

なるほど。多田さんいかがでしょうか。

(多田委員)

ということはこの総合計画の中で書かれたものを読み解くところなるというような感じですかね。

(事務局)

視点を変えて見ているというイメージかと思います。行政が施策を市民の方々に展開していく中で、市民がその施策を受けることでどう変わるのかというものを書いています。なので読み解くというよりも別の視点から少し見ている計画、ビジョンかと思います。

(多田委員)

ありがとうございます。もう1つ交流都市ビジョンと並列で新潟市マンガアニメを活用したまちづくり構想っていうのも分野別計画でありますよね。ということはマンガ・アニメの部分は外して考えるというような考え方でいいんですかね。

(事務局)

マンガ・アニメの部分につきましては、取り組み方針の3つ目のまち全体の活性化のところに一部触れております。文化芸術の範疇ということの整理です。それと、マンガ・アニメにつきましては、少しエッジを立たせてということで、これとはまた別に、まちづくり構想の中のちょっと位置づけが必要ということで、別途の構想を作っております。

それでちょっとよろしいですか。少しビジョンの位置づけということで、分野別計画というところの響きというところがいろいろ議論になっていたと思うんですが、先ほど大澤さんが俯瞰という部分と断層というお話をされました。総合計画がこれだけ厚いということで、それぞれの事業部門がいろんな目的で事業をやっているんですね。いわば縦の流れをイメージしていただければいいと思うんですが、ただそのときに文化芸術という横ぐしを入れることで、事業の効果の捉え方が少し変わってくる部分もあるのではないかとあります。ビジョンが果たす役割というのは、アクションそのものというよりも、取り組みを進める上での視点であり、それぞれの事業部門の目的に加えて文化芸術的な視点で見たときに、もう少しその果実というか、市民にお伝えできる部分というのは、多様というか、重層的になるのではないかとあります。ですので、いわば分野をつなぐ横ぐしの役割をこのビジョンに込めているのです。ですので、いわゆるアクションという部分では、おそらく総合計画から捉えていっても、またビジョンの中で施策の紐づけから捉えてもアクション自体は変わりません。ただ視点を変えることで、〇〇効果に価値を付加できると思うのです。また、先ほど説明した通り、市がこれをアウトプットベースでやるよということだけではなくて、受け取る側から見たらどうなのかについても思慮しました。市だけで進められるものではありませんので、既に活動していただいている方、また中間支援組織のように、我々よりも安定的に市民とお付き合いできる立

ち位置にいる方とも連携する上で、共通の理念の中で、ベクトルを合わせながら進みたいという想いもあります。

(若林委員長)

ありがとうございます。多田さん、今の説明を聞いた上でコメントありますか。

(多田委員)

この政策の方向性の3つの柱というのは、そういうふうな観点で見たとき非常にわかりやすいものになっているなど、そんなふうに思います。今はそれぐらいです。

(若林委員長)

ありがとうございます。皆さんからご意見伺う前に事務局に質問しますと、この取組方針11、12、13ページのダイヤモンド、オレンジ色での囲み部分は、アクションのようにも読めますが、これはアクションと捉えていいですか。そしてこれらの主語は「新潟市が」取り組みますということでしょうか。市民に対しての宣言みたいなことでよろしいでしょうか。

(事務局)

はい、そのように捉えていただいて構わないと思います。

(若林委員長)

この達成度が評価の対象になっていくイメージでよろしいですかね。

(事務局)

はい。

(若林委員長)

では、その前提で、伊野さんいかがでしょうか。

(伊野委員)

この理念と3つの方向性の中で、とっていいなと思ったことがあって。それはまず市民の方が一人ひとり意識をし、気づいていくということが、明記されているわけですね。それから最終的にその価値をきちっと認識して、最後はこの生み出していくという、この大きな繋がりっていいでしょうか。これとても大事なことだと思っていて、それをきちっと書かれたことが素晴らしいと思います。特に最初のやっぱり自分たちの住んでいるところの様々な文化や活動を意識して、そこに気づいていくことを大事にするのが、今本当に必要なんだろうと思っていました。ともすると、今までの傾向ですけども、周りの人とか外国の人とかあるいは偉い人とか、これは重要な文化財であると価値づけをして、それでいいんだというような流れでずっと来ていたけど、今ようやく自分たちでその価値を発見していくようなことが少し始まってきていて、それがどんどん波になっていると思うんですよ。周りから価値づけされなくても、実はこちらの隣にこんなものがあるんだぞということが、

そういう目を一人ひとりが持っていくっていうそれをすごく意識して、3本柱に入れる。この位置づけはとても素晴らしいと思って見ていました。ぜひとも、この方向性を持っていただきたいなと思います。

(若林委員長)

ありがとうございます。まさに、権威から価値づけされなくても自分たちで見つけておられる野内さん、いかがでしょうか。

(野内委員)

先ほどの小路めぐりの案内板や地図は、総合学習で2008年からずっと活用していただいておりますが、まちあるきを通して県外の方と交流していく中で、新潟市のガイドがすごいねって言われるのは、地元の学校と総合学習で関わっている事です。

子供達はシティガイドと歩く事で「歴史や地形を意識して」自分の住む町を体験する訳ですが、実はなかなか貴重な事であると思います。

小中学校の総合学習には毎年お声をかけていただいておりますが、日和山小学校や白山小学校と関わっているというのは、ずっと地域コーディネーターの方がいらっしゃるって繋げてくれているからですので、これからもコーディネーターの方々が活動しやすい環境作りに新潟市さんには関わっていただきたいと思います。

新潟を発信するという事でいえば、マンガ・アニメも大事だと思います。中央で流行ってるのを持って来るのだけでは無く、新潟発のマンガとかアニメにも期待したいと思っています。

新潟の歴史とか地形とか、風景などを知り、それらを上手く舞台にした作品が生まれるといいなと思っております。三条市とかががんばってますもんね。

(若林委員長)

ありがとうございます。「市民一人ひとり」はとてもいい言葉ですが、それで括ると隠れてしまうものがあります。例えばこの取組方針の中に、子供、若者、高齢者、障がい者が出てこないことに、今のお話を伺っていて気がつきました。なので具体的にどういう市民に、どの取組方針を重点的に届けたい、というようなことが見えてくると、総花的にならずに見えてくるものがあるのかなと思いました。

堀内さんいかがでしょう。次期ビジョン素案について。

(堀内委員)

今までのお話をちょっと聞いてまして、前回のビジョンがだいぶいろいろな取り組みが詳しく載っているの、自分たちの取り組みがどういうふうな理念のもと、基本方針のもとののがわかりやすいわけなんですけど、今回の計画というのは本当に理念的なものなのだというふうな、市の方の方針がね、よくわかったところなんです。ただ私もこれ読んでまして総合計画のところでは、割と子供子供というふうな記載があるんだけど、おっしゃったように計画の中ではそういうふうな具体的な文言がないとか、あるいは新潟に固有な取り組み、ここでは踊り文化とか、みなとまち、アニメとか書いてあるんですけど、新潟にしかないものの記載が入ら

ないものなのかなというふうなこともちょっと思ったんですけども、事務局の方の説明だと、理念的なというふうな部分でくくられているというふうなところだったのかなと思いました。

ただ実施計画は作らないというふうなこと等も聞きましたけれども、やはりその、あの事業の紐づけをですね、ある程度見せていただかないと、あの市民一人ひとりといいましても、取り組んでいる方としても何となくほわっとした感じでしか示されなくて、どういうふうなもとの自分たちの取り組みが方針のもとなされているのだというふうなところが整理されないと、市民一人ひとりもなかなかわかりづらいところがあるのではないのかなと思いましたので、実施計画はなくても紐づけの方はちょっと若干やっぱり見せていくような内容の方がわかりやすいのではないのかなと思いました。

(若林委員長)

ありがとうございます。

(事務局)

具体的な取り組みのところにに関してですが、いろいろ関係各課にどういった文化関連政策があるかということで、現行ビジョンに紐づく関連政策というのは250事業以上あります。そちらを今度はこの次期ビジョンに紐付けるとなったときに、おそらくそのままのスライドというのは厳しいのかなと考えています。この理念、方向性、方針というものに照らしたときにどこに紐づくのが最適なのかを精査いたします。現行ビジョンでは紐づいていたけれども次期ビジョンでは紐づかない、そういった政策も多々あるかと思えます。作業中でありまして本日お見せできないのが大変申し訳ないと思っておるところですが、イメージといたしましては例えば、心の豊かさの部分につきましては、鑑賞機会の提供というような事業が紐づくのはもちろんのことですし、先ほど野内さんもおっしゃっていたような、学校に向かっていくアウトリーチのような施策も新潟市もそうですし、それこそゆーとぴあさんとかも様々な施策をされていますので、そういったアウトリーチ的な部分というのも、こういった心の豊かさに入ってくるころなのかなと思います。紐づく事業のうちどの事業が子供向けの事業なのかということがわかるように、もしかしたらそういった観点でのわかりやすさみたいところがリスト化する際に必要なのかなとも思いました。

(若林委員長)

ありがとうございます。では残り時間は評価について意見交換しましょう。素案のスライド番号5ですね。評価の体制が示してありますが、誰がどのように評価するかも大事なんですが、「何を」評価するかも大事なんですよね。ビジョンは、こういうふうにより市民が変わったらいなという姿を描きますが、本当にそう変わったかどうかを評価するのは非常に難しいです。因果関係の確認も難しい。素案の内容は、かなり高度な評価を必要とするという点だけ、まずはお伝えして、皆さんにアイデアや評価体制についてご意見を伺います。

(伊野委員)

まず市民アンケートが今回送られてきましたよね。基本的に同じアンケートを継続すると変化がわかります。これまでのアンケート内容と今回のアンケート内容は、似ているようでちょっと違うので、次のときの評価としても、本当に市民が例えば文化活動に参加したパーセントが高くなったかっていうことを見るためには、何らかの指標、実際のアンケートの中身をきちっとしておく必要があるのかな。そうしないと、現時点と次の評価のときの変化を検証するのが難しい部分があるなどというのがまず1点。それからこの文化創造推進アドバイザーから随時、必要に応じて意見を求めるということで、数年に一遍よりもいいのだろうと思いました。ただ随時というのは誰が判断をして、どういう時なのか、例えば逆にアドバイザーの方が、これってどうなっているのみたいな、あるいはこういうふうにもっとこうしたらというのものもあるかもしれないですよ。そうしたときに、それも随時に入るのか。必要に応じてとなると、やはり年度末の3月にやればよいということになりかねない。まずここら辺、きちんと機能させて、いい形でお互いに評価をして進んでいくような、そういうようなシステム、仕組みが見えるといいなと思いました。

(若林委員長)

ありがとうございます。アンケートの経年調査がしっかりできていないと変化が見られないというご指摘と、「随時」とは誰が判断するのかという大事な質問がありました。そこをもう少し詳細に図式化するといいいのでしょうか。評価の専門家、大澤さんいかがでしょうか。

(大澤副委員長)

細かいことかもしれないんですけどね、先ほどの伊野先生からもあった新潟市でやった調査で気になったのが、直接鑑賞した文化芸術ジャンル、文化芸術の経験を聞いているわけですけど、国がやっている文化に関する世論調査をベースにはしているんですけども、選択肢の一つにアニメーション、マンガっていうのがあるんです。これは厄介だなとちょっと実は思ったんです。マンガは直接鑑賞するっていうのは、音楽や美術のようにそのホールや美術館の文化施設に行っ、あるいは映画館に行ってみるとやっぱり違う性格のものだから、マンガが入っているだけで、それを他の文化芸術ジャンルと同様に経験としてカウントするのがいいんだろうかどうなんだろうかっていうことがちょっと気になった。それがどう影響するかというと、例えば子供の文化芸術の経験を聞くときにマンガを読むよっていう子供はいっぱいいると思うんです。それをもって文化芸術の経験をしたことにしているのか。マンガを加えた経緯もあったんだろうけれども、気になるのが正直なところです。これも含めて、総合計画の方で示されている施策の評価項目は、やっぱり今の数値も含めた何人とか何割っていう定量的なものが本当にそればかりになるわけですね。だからこそ、総合計画と文化創造都市ビジョンが違うのは、やっぱり成果を見たいわけですね。アウトプットだけじゃなくてアウトカムを見たい。そのアウトカムについて丁寧に評価をするっていうことが必要だから、評価のあり方、今の体制でいうと、市民アンケートの聞き方であったりそのアドバイザーの目線というか、眼差し、視点っていうのが、総合計画とは違う視点で語られなければいけ

ないと思っています。今の時点で見られているものに関しては以上です。

(若林委員長)

ありがとうございます。すいません、予定が過ぎていますが、25分ぐらいまでいただいていいですか。現場として評価を受ける側でもある堀内さん、評価についてありますか、何かありますか。

(堀内委員)

なかなか評価というのは難しいところで、さっきのアウトプットアウトカムの話もありましたけれども、うちも国から補助金をもらっている関係で、かなり評価というところには神経質になるんですけども、今回いただいた資料の中で市民アンケートは、これはなかなかやっぱり生の声が聞けていいなというところで経年調査というふうなことを念頭に置いて、これは続けていただければと。これは大変なのかなと思いますけれども、必要なことなのかなと思って。生の声っていうのはやっぱり数字の何%何割っていうのもあるんですけども、そして回答者の率もそんなに高くはない、こういうアンケートではありますけれども、やはり生の声も現場からすると聞きたいなというところなんです。

(若林委員長)

ありがとうございます。生の声というお話があったんですけども、多田さん、観光の分野で、定量的な数字の評価以外に、定性的な評価、生の声ですとかエピソードはどのように評価としてすくい上げているか、参考までに伺えますか。

(多田委員)

最近なんかよくそういうことを、評価のことを言われるんですよ。データとか。私達は今地域の吸い上げ方っていうのが何もないんですよ。何となく皆さんの感想を聞いたりとかいうのはあるんですけど。ただ観光客の評価といたしましては、旅行事業をやっていますので、予約をいただいた方々から、星いくつみたいなこととか、コメントとかはリアルタイムで上がってくるというようなやり方はできています。ただ、本当に難しいのは地域の評価をどんなふうに得られるかとか、地域の評価を得るために、どう自分たちをアピールしていくか、その手法なんかは足りないとされています。例えば今、年1回ぐらい業績発表会を市民の前ですること、そういうことも1つであると指導受けたりもしているんですけども、評価は非常に難しいです。

(若林委員長)

ありがとうございます。そうですね地域の声をどうすくい上げるかは非常に難しいなと思います。野内さん何か評価で、コメントありますか。

(野内委員)

地元の言葉をお伝えさせていただきました。ということで結構です。

(若林委員長)

ありがとうございます。では皆さんここまで様々なご意見をいただきましてありがとうございます。

(伊野委員)

参考資料 2のですね、推進体制の左の下の方ですけども、市民の方に、ここに支援と相談っていうのがありますよね。これは今までの議論を反映するともう少し違う用語も入っているのかなと。例えば提案とか協働とか。そういうことがむしろ本質的なことになるのじゃないかなと思います。それから行政の方からの施策展開が一方通行ですけども、これももしかしたら、もう一方、反対側の矢印、文化活動とか。要は繋がる、どっちも活動していくんだと。その中でどう協働体制を作っていくのかということが、行政側からやるっていうことだけじゃなくて市民側からも一緒にやっていくというようなイメージがこの中に出るといいと思いました。

(若林委員長)

大事なご意見ありがとうございます。協働体制を図式化して見せていく方法は皆苦労しているんですね。信州のアーツカウンシルの図が参考になると思います。

予定時間を過ぎてしまいましたが、本日の議事の意見交換、たっぷり皆さんからご意見出していただいて無事に終了できました。では、進行を事務局にお返しします。皆さんありがとうございました。

6 その他

(司会)

若林委員長。どうもありがとうございました。次に、次第の 6、その他ということで、事務局より事務連絡をさせていただきます。

本日、委員の皆様からいただきました意見をもとに、事務局にて素案について、改めて検討させていただきます。策定に向けた今後のスケジュールとしましては、作成した素案について、10月上旬にパブリックコメントを行い、11月頃に第2回の文化創造推進委員会を開催し、皆様より最終的なご確認をしていただきます。なお、第2回会議については、オンラインでの開催を予定しております。日程等については、また別途事務局よりご相談させていただきますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

7 閉会

(司会)

以上をもちまして、令和5年度第1回新潟市文化創造推進委員会を閉会いたします。委員の皆様、本日はお忙しいところご出席いただき、大変ありがとうございました。